

## 看護職部門

# 四三の新米看護師

み い だ し ん じ  
【三井田 信二・広島県】



優秀賞

初めて、入院患者さんの担当になった時のことが、今も一番印象に残っている。私は看護師ではあるけれど、人とは少し違う。男性であることは、今はそう珍しいことではない。だけど43歳の新米看護師。年齢的にも立派なおっさんだし、実際に見た目もおっさんだ。当然、滑稽だし、異様でもある。はっきり言って印象は悪い。

入院される患者さんは50代男性だった。きっと女性の看護師に、お世話されることを望んでいただろう。私が患者さんの立場でも、そう思うのだから仕方ない。「なんじゃ、あんた看護師なんかい」。それが最初にぶつけられる言葉。「女の子がええし、せめて若い方がええわ」。苦笑いを浮かべながらも、心情は穏やかじゃなかった。

だけどそんなことは覚悟の上で、この職に就いた。これは仕事だ。私ができることをやらなければならないし、スキルアップのためにも経験を積まなければならない。私は献身的に努めた。看護師はただ仕事をこなすだけではいけない。患者さんは病気と向き合っているのだから、常に不安を抱えている。少しでも心の支えになりたい。それでこそ私がこの仕事について意味がある。

その努力の甲斐があっただけで、無愛想だった患者さんも少しずつ心を開いてくれた。料亭に勤めているそう。私も看護師の前は中華の料理人だったので、話が合って盛り上がった。

退院する日、どうして看護師になったのか尋ねられた。「生まれてきた娘が、体が不自由だったんです。目も見えないし、耳も聞こえないし、話すこともできないし、一生歩くこともできません。でも育てると決めた以上、私がやれることは全てやりたいんです」。

患者さんは少し涙ぐんでこう言った。「そんな事情があったことも知らんで、ひどいこと言ってすまんかった。今度、娘さん連れて、うちの料亭に來い。うまいもんごちそうしたる」。おっさんが泣くのはみっともなかったけど、どうにも涙が止まらなくて、困った。